

## (Gels.資料)麻痺的な病気の症状について

### ○ポリオ(急性灰白髄炎・小児まひ)

横浜市立市民病院 石原淳

感染しても多くの場合は発症しないが、感染者のおよそ5%に発熱、頭痛、喉の痛み、吐き気、嘔吐といった風邪のような症状が現れる。この段階では、症状のみから風邪と鑑別することは困難。約1~2%が前述の症状に引き続き、無菌性髄膜炎を発症する。そして感染者の0.1~2%はウイルスが脊髄に感染して重症になり、手足に弛緩性まひ(末梢神経の障害により、力がまったく入らない状態)が現れるという典型的な症状が出る。まひの部分には痛みが生じ、後遺症として一生残ることも。また呼吸困難で亡くなるケースもある。死亡率は小児で約4%。

### ○ギラン・バレー症候群

医療法人社団輝生会 初台リハビリテーション病院 菅原 英和

典型的な例では発症の1~3週間前に風邪をひいたり下痢をしたりといった感染症の症状が見られる。その後、数日から数週間の間に四肢の筋力低下、脱力感やしびれ、痛みなどの症状が、左右対称に現れる。顔面神経麻痺や嚥下障害といった脳神経障害、頻脈、起立性低血圧などの自律神経障害が起こることもある。重症例では麻痺が進んで歩行障害を起こしたり、人工呼吸器を要する呼吸困難を生じたりすることもある。急速に症状が進行することが特徴で、通常4週間以内に症状はピークとなり、その後に回復に向かうことが多い。

### ○インフルエンザ

東邦大学医療センター 大森病院 瓜田純久病院長

感染後1~3日ほどの潜伏期間を経て複数の症状が数時間単位の非常に短い期間で急激に発症。風邪は発症後の経過が緩やかでくしゃみや喉の痛み、鼻水・鼻づまりなどが主たる症状であるのに対し、インフルエンザは発熱(38℃以上になりやすい)をはじめ、頭痛、喉の痛み、関節・筋肉の痛み、咳、鼻水、全身のだるさなど全身に症状が急激に現れることが特徴。子どもや高齢者、妊婦、また免疫力が弱っている人が感染すると、肺炎や、インフルエンザ脳症、ARDS(急性呼吸窮迫症候群。肺胞でのガス交換がうまく行えず、急な息切れや呼吸困難などが出現する病態)、急性心膜炎、心筋炎などの病気に発展するなど重症化しやすい。

### ○ロビン・マーフィー「Covid 2019」資料~スペイン風邪での記述(PDF/P.19~21)

オハイオ州デイトンのT・A・マッカン博士の報告によると、アロパシーで治療された24,000例のインフルエンザの死亡率は28.2%であった。ホメオパシーで治療された26,000例のインフルエンザの死亡率は1.05%であった。

この数字は、フィラデルフィアのW.A.ピアソン博士(ハーネマンカレッジ)からも支持されている。(ハーネマンカレッジ)のW.A.ピアソン博士は、ホメオパシーで治療したインフルエンザの26,795例を記録し、上記の結果を支持しています。